

アクティブ・ラーニングを取り入れた情報ボランティア育成講座の実践

Implementation of a Volunteer Training Course that Incorporates the Active Learning

鷲 尾 敦

Atsushi Washio

(要 約)

平成 25 年、津市中央公民館の人づくり講座として、情報ボランティアの育成を目的とした講座「地域力創造セミナー☆パソコンの魅力を伝えよう」を開講した。所属する「情報ボランティアみえ」で講座の設計と運営を行い、グループ討議や講師実践などの受講者の能動的な学習参加を求めるアクティブ・ラーニングを取り入れた。修了生は地域の情報ボランティア活動に意欲的に参加し、講座運営スタッフも新たな活動を始めるなど講座の成果が見られた。

(キーワード)

情報ボランティア、アクティブ・ラーニング、グループワーク

1. はじめに

コンピュータやネットワークが日常的に活用される時代にあっても、若者に比べ高齢者は IT に関する知識を得たり、技術を体験したりする機会は少ない。IT 化が広がれば広がるほど世代間の差は広がる一方である。そのため、高齢者向けの ICT を活用する学習機会を提供する様々な場が必要と考え、地域の情報ボランティアと学生との協働で「シニアパソコン教室」を開いている。20 名、ないし 30 名の受講募集に倍以上の応募があり、もっと機会を増やして欲しい、連続講座として取り組んで欲しいという要望が絶えない。しかし、情報ボランティアとして参加されている方々は、それぞれが仕事を持っての活動のため、開催日を増やしたり、連続講座として内容を深めていくような要望には答えることができないでいる。この活動に参画できる情報ボランティア養成が課題となっている。

平成 25 年度、津市中央公民館の移転に伴い、公民館では新たな講座の検討が始まった。担当者から、情報関係の講座について検討してもらえないかとシニアパソコン教室の実績から「情報ボランティアみえ」に打診があった。それは、人づくりとまちづくりを目指した新たな講座で、移転先の PC や教室設備を利用することも要望にあった。「情報ボランティアみえ」の定例学習会において、講座のねらいや内容について検討を重ね、「地域力創造セミナー☆パソコンの魅力を伝えよう」という情報ボランティアの育成をねらいとした講座を提案した。平成 25 年 10 月から 5 回連続の新たな人づくり講座を始めた。

2. 情報ボランティア活動

平成 7 年から、当時の幼児教育学科情報教育コースの授業成果を地域に還元することを目的として、地域の幼稚園に学生たちが作成した電子紙芝居作品を持ち込んで、幼児のマルチメディア遊びを提供する実習を 4 年間続けた。学生による情報系の地域貢献の始まりであった。その後、平成 9 年から始まつ

た三重県生涯学習センターの地域情報リーダー育成事業に、平成10年度から教養学科のゼミ活動として参画した。公民館の情報発信支援活動を通して、将来の地域情報リーダー育成を目指した活動であり、振り返れば、これが情報ボランティアを育成する原点であった。そして、平成11年、公開講座「ホームページ作成入門」の受講者の「講座終了後も学び続けたい」という声を受け、短大生とコラボしての地域公民館のホームページ制作活動への参加を呼びかけた。これが、一般の方を巻き込んでのボランティア活動の始まりであった。短大生の活動は、2年という短い期間であり、活動の継承という点で困難があった。公民館のページを継続的に運営していくためには、核となる人材が必要であった。呼びかけに答えてくれた公開講座OBの皆さんには、その重要な役回りを担って学生とのコラボレーションによる公民館のホームページ制作を進めた。津市内の中央公民館、一身田公民館、白塚公民館、豊里公民館のホームページ制作活動を、市が統一してWeb発信をするようになる平成15年まで続けた。

その後、すばる児童館や中央公民館などと交流を進め、地域の子どもたちの土日の学習の場の提供を目的とした「子どもパソコン教室」を平成14年から中央公民館でスタートさせた。運営をスムーズに進めるために任意団体「情報ボランティアみえ」を結成した。その後9年ほど、ボランティアと学生たちの努力によって教室運営を続けることができた。平成21年に津市中央公民館から、情報弱者である高齢者の初心者対象の講座開講の依頼を受け、60歳以上対象の課題講座「シニアパソコン教室」の運営をすることとなった。その後、子どもの活動の場や情報教育の充実に伴い「子どもパソコン教室」はその役割を終了したが、シニア向け教室は今年度（平成26年度）で6年を迎えるますます人気である。

「情報ボランティアみえ」の活動は、地域の情報発信力と情報教育力を高めるための支援をすることが目的で活動の中心であるが、短大生とのコラボレーションも重要な活動の柱であり、活動を通して学生を良き社会人として導いている。さらに生涯学習者として互いに研鑽を深めていくことも重要な柱であり、月一度の定例学習会を継続している。

3. ボランティア育成講座の設計

3. 1 講座の検討

平成25年2月の「情報ボランティアみえ」の学習会で新たな講座にチャレンジすることを決め、その後何回かの学習会で、講座の内容と実施方法について検討した。「講座の規模は、どれくらいか」「実現できる時間数はどれくらいか」「人づくり講座としての内容はどの様なものが適当か」「現在のメンバーで何が教えられるのか」「自分たちは、いったい何を伝えたいのか」「そもそもニーズはあるのか」など、まずは講座の方針やねらいについて意見交換をするところから始めた。

表1 「情報ボランティアみえ」の活動理念

- ・地域情報発信支援活動を通じ、地域の将来を担う学生を情報リーダーとして健全育成する
- ・情報教育面で、子どもから高齢者までのあらゆる生涯学習者を支援する
- ・会員自らも生涯学習者として自己啓発につとめ、会員相互の学習を支えあう

表2 講座の意見交換

- ・講座のボリューム 回数 時間数 期間
メンバーが負担できる時間
- ・ひとつくり・まちづくり講座としての内容
現在のシニアパソコン教室との関係
- ・メンバーで何が教えられるか
優れた技術はないが自分たちの手作りでいい
技術や知識がなくても共に学ぶ姿勢で学習支援が可能
- ・何を伝えたいか
初めて教えたときの感動を伝えたい
自分達の活動の輪を広げたい
情報ボランティアみえの活動への賛同者
教えることは学ぶこと
教える技術も伝える必要はないか
- ・ニーズはあるか

議論の末、「『学ぶ』から『教える』へ。自分で使うだけでなく、便利で楽しいパソコンの魅力を伝える人になりませんか。実際にパソコン講座で教える体験もします」をキャッチフレーズに、地域の人づくりに貢献でき、情報ボランティア活動に参画できる人材育成を目指すことに決め、その内容や方法についてさらに検討を進めた。

3. 2 人づくり講座におけるアクティブ・ラーニング

この新しい講座は、「地域力創造セミナー☆パソコンの魅力を伝えよう」という名称とした。この講座は、従来の「シニアパソコン教室」のようなパソコンの知識や利用技術を教えて、知識技能を身につけてもらう講座とは、到達目標が異なる。目標が異なるからこそ、実施方法

も異なる。その違いを表4に示す。受講者に伝えたいことは、「知識・技術」ではなく、「知識技術の面白さ」であり、「教えることの魅力」である。講座運営に必要な講師側の能力は、「教える技術」や「内容についての知識」はもちろんあるが、それよりも「思いを伝える能力」「思いを伝えたい意欲」であり、それを裏付ける「活動経験」である。そして、情報ボランティアという活動は協働で進めることから、目標に向けて、グループができる最高のパフォーマンスを引き出す「ファシリテーション能力」も必要と考える。また、受講者の到達目標は、従来のパソコン教室では、知的好奇心が満たされたり、パソコンが使えるようになったり、これから学ぶきっかけになったりすることであるのに対し、新講座では、「教えることの魅力を理解する」こと、「主体的に自らも学ぶ姿勢を身につける」こと、そして「情報ボランティア活動に参加するきっかけを得る」ことが目標となる。講座における受講者間の関わりは、従来講座では特に必要としないが、新しい講座では大いに関わって貰う必要がある。

このような違いを考えた時に、一方向に知識が伝達される従来型の講義形式の講座では、その実現は難しい。そこで能動的な学習参加を求めるアクティブ・ラーニングの手法を取り入れて、受講者が主体的に学習活動に関わる講座作りを検討した。今回用いたアクティブ・ラーニング手法は表5に示した通りである。

表3 講座の目標とキャッチフレーズ

・講座の目標	人づくりに貢献でき、情報ボランティア活動に参画できる人材育成を目指す講座
・キャッチフレーズ	「学ぶ」から「教える」へ。 自分で使うだけでなく、便利で楽しいパソコンの魅力を伝える人になりませんか。 実際にパソコン講座で教える体験もします。

表4 従来型講座との違い

比較項目	従来型のパソコン講座	今回のひとづくり講座
受講者に伝えること	・知識・技術	・知識技術の面白さ ・教えることの魅力
講座運営に必要な能力	・教える技術 ・内容についての知識	・思いを伝える能力 ・思いを伝えたい意欲 ・ファシリテーション力 ・活動経験
受講者の到達目標	・知的好奇心を満たす ・できるようになる ・学ぶきっかけ	・教えることの魅力を知る ・主体的に学ぶ姿勢 ・ボランティアへのきっかけ
受講者間の関わり	・特に必要はない	・ともに学ぼうという姿勢

表5 アクティブ・ラーニング手法

- ・グループ討議
記録、発表者（受講者）
ファシリテーター（スタッフ）
- ・グループウェアサービスの活用
サイボウズLiveの利用
連絡・資料配布・質疑、グループ活動
- ・グループワーク
テキスト制作
リハーサル
- ・パソコン教室での講師・援助役の実践
当日の講師・援助役の体験
反省会（振り返り）討論

4. ボランティア育成講座の内容

4. 1 講座の内容と方法

この講座の全体の流れを表6に、各回の具体的な内容を表7に示す。講座は、ミニ講義とグループ討議を交えた2時間講座を3回、実践の場として「パソコン教室」に運営スタッフとして参加し、反省討議も実施する1日講座を2回、計5回講座とした。1、2回目は、ガイダンスとして、「教えることと学ぶこと」「ボランティア活動とは」「情報ボランティアみえの活動の歴史」などのミニ講義を行った。ミニ講義を受けてグループに分かれて討議をするが、「情報ボランティアみえ」のスタッフが進行役として各グループに入り、ファシリテーションを行って討議を進めた。各グループでは、受講者の中から記録と発表者を決め、討議後、全体会で各グループの発表者が発表をした。初回のグループ討議は、参加者のパソコン歴を話題にしながら受講者間の交流を目的とした。2回目のグループ討議は、「こういう教室があつたらいいな」というテーマで、教室の企画、構想を話題に討議を進めた。他に、1,2,4回時には、「教えるこつ」をテーマとしたミニ講義をボランティアが行った。

表6 講座の概要

I 教えることとボランティア ミニ講義・グループ討議 10月12日(土) 10:00~12:00 (中央公民館)
↑この間、サイボウズの登録 メッセージ交換
II 私が教える教室の構想 ミニ講義・グループ討議 11月30日(土) 10:00~12:00 (中央公民館)
↑この間、サイボウズの利用練習 情報交換
III シニアパソコン教室の援助者体験 グループ討議 12月15日(日) 9:30~16:00 (高田短期大学)
↑この間、サイボウズで各グループ情報交換、意見交換
IV 講座の担当コーナーの検討・準備 グループワーク 2月15日(土) 10:00~12:00 (中央公民館)
↑この間、サイボウズで各グループ情報交換、意見交換 テキスト作りやリハーサル実施 (高田短期大学)
V シニアパソコン教室での援助者・講師体験まとめ 3月2日(日) 9:30~16:00 (高田短期大学)

表7 各講座の内容

初回 教えることとボランティア 中央公民館 10月12日 10:00~12:00	2回目 私が教える教室の構想 中央公民館 11月30日 10:00~12:00	3回目 パソコン教室援助体験 高田短期大学 12月15日 9:30~16:00
<ul style="list-style-type: none"> 開会の挨拶 (公民館) 講座の趣旨 (情報ボランティアみえ会長) ミニ講義「パソコンの魅力を伝えること」 -「情報ボランティアみえ」の活動を通して- (筆者) ミニ講義「ボランティア活動とは」 (高田短大ボランティア支援室 杉谷哲也先生) グループワーク (全体進行 スタッフ) 「PCとの関わり、受講の目的、お話を聞いて」 発表、記録 (受講者) ファシリテーター (スタッフ) グループワークの発表 (代表者) 人に教えるコツ「印象、声の出し方等」 (スタッフ) グループウェア (サイボウズLIVE) の利用と登録 (筆者) 閉会の挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> 挨拶と今日の予定 (スタッフ) ミニ講義 「子どもパソコン教室・シニアパソコン教室の紹介」 (情報ボランティアみえ会長) グループワーク (全体進行 スタッフ) 「こんなパソコン講座があつたらいいなあ」 発表、記録 (受講者) ファシリテーター (スタッフ) グループワークの発表 (代表者) 人に教えるコツ「学びあいの精神」 (スタッフ) サイボウズLIVEの活用 (筆者) 次回の講座 (シニアパソコン教室) について (筆者) 閉会の挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> 挨拶・今日の体験について (会長) 援助者としての姿勢、日程 シニアパソコン教室 援助者体験 (10:00~14:30) パソコンの基本操作、文字入力、インターネット入門 年齢状況、ネット利用事例、インターネット実践 シニアパソコン教室スタッフ反省会 (学生スタッフ含む) 次回に向けたミーティング (会長) 次回に向けての準備について グループワーク (スタッフ ファシリテーター) 「担当する指導内容について」
4回目 担当部分の流れ検討 中央公民館 12月15日 10:00~12:00	5回目 パソコン教室講師体験 高田短期大学 3月2日 9:30~16:00	
<ul style="list-style-type: none"> 挨拶 (会長) 各グループの準備状況報告 (代表者) 3月2日の全体の流れ (スタッフ) グループワーク (全体進行 スタッフ) 「講座内容、当日の役割、準備の担当」 発表、記録 (受講者) ファシリテーター (スタッフ) 各グループの状況報告 (代表者) 人に教えるコツ「講師の準備」 (スタッフ) 講座終了後の実践について (会長) 次回について 集合場所、テキストの締め切り、リハーサル等 	<ul style="list-style-type: none"> 教室実施打ち合わせ・準備 シニアパソコン教室 援助者及び講師 -パソコンの基本操作 (学生講師) -思い出のカード作り (Aグループ講師) -インターネット入門 (学生講師) -ネットショッピング (Bグループ講師) -インターネット利用実践 シニアパソコン教室スタッフ反省会 (学生含む) ・修了式 	

講座の期間が長く、講座と講座の間が開いていることから、グループウェアサービスを活用して、情報交換を進めることとした。そのツールとして無料で使える「サイボウズLive」を採用した。運営側からの案内や資料の配布、グループでの意見交換に利用した。利用方法を初回講座で説明し、メールアドレスを頂いて受講者に招待メールを送り、講座2回目に接続環境や利用状況などの確認をした。

講座の3回目は、シニアパソコン教室での援助者体験である。可能な人はパソコン教室受講者の横に

についての援助者の体験、援助役が難しいという受講者は見学とした。その日の反省会後の「パソコンの魅力を伝えよう講座」のミーティングで、最終日の「シニアパソコン教室」で各グループが30分ほどの内容を担当する旨を説明した。そして、2つのグループに分け、次回講座までにサイボウズLiveを利用しながら各グループで担当する内容をまとめるよう指示をした。

講座の4回目は、最終日の担当内容について話し合い、準備を進めることであった。当然、時間内では完了せず、サイボウズLiveで情報交換しながら、グループごとに別途集まってテキスト制作やリハーサルを行った。

最終日、受講生は、シニアパソコン教室で援助役と担当する個所の講師役をグループで務めた。終了後反省会を持ち、講座受講者と「情報ボランティアみえ」のメンバーで意見交換を行い修了した。



写真1 講座の様子

4. 2 特徴的なアクティブ・ラーニングの取り組み

(1) グループ討議

ミニ講義後のグループ討議では、「情報ボランティアみえ」スタッフが各グループの進行役になった。グループワークマニュアル（表8）を用意し、グループワークの進め方やゴールの確認、ファシリテーターとしての役割の理解が進むよう準備をした。実際のファシリテーションは訓練や経験が必要でとても難しいので、

まずはスタッフが受講者全員から意見を引き出すファシリテーションをすることの意義を理解し、意識して対応すればそれで良いと考えた。

表8 グループワークマニュアル記載内容

- ・グループ討議の目的、ゴールの確認
- ・テーマ設定の検討
- ・グループ討議での各役割
- ・討論のルール
- ・ファシリテーターの役割
- ・ファシリテーションの方法

(2) グループウェアサービスの利用

サイボウズ Live は、当時 1 グループ 200 名（執筆時は 300 名）まで無料のグループウェアを提供するクラウドサービスである。今回の講座は、期間は長いが講座回数が限られた連続講座であり、講座と講座の間を補完する機能が必要であった。特に、今回はグループで達成しなければならない課題があり、グループ内の受講者間で情報交換や資料交換を主体的に効率よく進めいかなければならなかった。また、初めての講座運営であるため、スタッフからの連絡や情報提供、資料提供がいつ必要になるかわからなかつた。いついかなる段階でも受講者に情報発信ができ質問対応できる機能が必要であった。さらには、ICT 技術を理解し使えることも情報ボランティア活動には必要であり、その実践の場としての意義もあった。

利用するサービスとして Facebook のグループ機能も考えられたが、初めて出会う受講者間で個人的な情報も交換される SNS の利用は抵抗がある受講者がいると考えられた。個人情報が流れず、この目的のためだけに活用でき、かつ無料で実績のあるサイボウズ Live を採用した。

表 9 サイボウズ Live の活用目的

- ・講座の支援ツールとして交流・学習の推進
- ・主体的にネットを活用する能力の育成
- 講座資料掲載（自ら獲得）
　　情報交換・質疑応答（主体的に学ぶ態度）
- ・グループ活動の促進
　　グループごとの講座のコーナー企画の準備
- ・講座間の学習活動の補完

5. 講座の結果

5. 1 初回アンケートの結果（受講者像）

20 名募集で初日 17 名の出席であった。パソコン歴は、40 年という人もいたが、数年から 10 年程度の方が多く、年齢は、70 代 10 名、60 代 4 名、50 代 2 名、40 代 1 名である。指導経験は、「教室で指導」が 1 名、「個人的に人に教えたことがある」が 4 名であった。受講目的は、「能力アップとパソコンの魅力を伝えたい」「指導の仕方」「地域に貢献」など講座の趣旨にあう声が 6 件あったが、「自分のスキルアップのため」という声が 11 件と半数以上であった。パソコン技術を学べるいつもの公民館講座と同じような感覚での参加で講座提供側の思いと違う思いをもった受講者が多くあり、その後の講座の進行が心配された。検討の末、当初のねらい通りに講座を進めることにした。

表 10 受講者の基本情報

パソコン経験	人数	年代	男性	女性	合計	教えた経験	人数	講座のねらいと異なる回答
40 年	1	70 代	3	7	10	教室で教えている	1	・パソコンを教えていただけて思っていました
30 年	1	60 代	1	3	4	個人的に教えたことがある	4	・パソコンの基礎を学びたい
11 年～15 年	5	50 代		2	2	パソコンは得意だが経験はない	2	・パソコンの技術、仕組みが知りたい
10 年	3	40 代		1	1	なし、白紙	10	・パソコンの分からないところなど教えてほしかった
3 年～6 年	4	合計	4	13	17			・パソコンのスキル向上など
不明	3							

5. 2 受講者の変化

表 11 に示すように、参加者は回を重ねるごとに少なくなり、グループ構成も最終的に 2 グループとなった。最終日に出席したのが 6 名、1 名は日程があわなかつただけで、最終の講座に向けてテキスト制作などを協力して進めており、実質的な修了者は 7

表 11 参加者の推移

・1回目	17名	4 グループ
・2回目	13名	3 グループ
・3回目	10名	2 グループ
		（支援スタッフ参加 9 名 見学 1 名）
・4回目	6名	2 グループ
リハーサル	7名	2 グループ
・5回目	6名	2 グループ (修了 7 名)

名であった。講座受講の目的があつていた人数に近い数に最終的には落ち着いたと言える。各組の講座の内容は、『思い出のカード作り』『ネットショッピング』であった。最終日の修了者のコメントを表12に示す。講座で学んだことに感謝と達成感を感じていることがわかる。講座終了後、修了生の2人が公民館で自らも学ぶために多くの人を集めてPCの自主学習講座の企画運営を始めた。修了生の6人が「情報ボランティアみえ」に参加し、定例の学習会に参加するとともに、地域のパソコンの自主学習グループの指導補助に加わったり、平成26年度シニアパソコン教室初回講座の一部を担当したり、活動を進めている。

表12 講座終了後の受講者の声（アンケート）

- * この講座で学んだこと
 - ・人を教えるには、その何倍もの知識が必要であることを学びました。また、準備の大切さ、想像力を働かせていろいろ想定しておく大切さも学びました。
 - ・学生さんの講習が前回より素晴らしい上達していました。
 - ・人との和、教えることの難しさ。
 - ・一つのことをみんなで協力して、勉強できたことは、自分自身成長できました。
- * 講座終了後、学んだこと体験したことどう生かしたいか
 - ・公民館自主講座の準備をすすめています。
- * 感想
 - ・講座に参加した時は、近所の人や友人に教えるコツを学びたいと思っていましたが、まさか講師体験までさせていただくことになるとは思っていませんでした。貴重な体験をさせて頂き感謝しています。ありがとうございました。
 - ・テキストを作る難しさがわかりました。教えることは難しかった。

5.3 運営側 情報ボランティアみえスタッフの変化

「情報ボランティアみえ」のスタッフは、講座運営で積極的な対応をした。この講座を立ち上げ進めていくことは、「情報ボランティアみえ」にとって一つのプロジェクトであり、スタッフにとっては、その実践がアクティブ・ラーニングそのものであった。講座のコーディネート、講座の講師として前に立つこと、グループ討議でのファシリテーションやサイボウズでの積極的な発信（掲示板上のファシリテーション）、グループの指導案作りやテキスト制作における助言、反省会等での積極的な発言など、主体的な活動で満ち溢れていた。

講座終了後は、新たなメンバーの活動の場の提供も検討し、地域の二つのパソコンの自主学習グループの指導を担当するという新たな取り組みをはじめた。また、月に一度の学習会については、いろいろな職業、技術力、PC活用経験など、それぞれ異なる多様なメンバーが如何にして学んでいくか、学習会をより意義のあるものにするにはどうすれば良いか、課題を明確にし学習会の改善を図っている。このように、ボランティアスタッフもこの講座運営を通して大きく成長をしていることがわかる。

5.4 グループウェアサービスの利用について

具体的な指導内容の検討やテキスト制作を、各グループで進めなければならない時期から、サイボウズLiveは積極的に使われ始めた。また、グループのファシリテーターを担当するボランティアからも、積極的なアプローチがあった。具体的には、掲示板に6つのカテゴリーが立ち上がり、その中34件のトピック記事がアップされ、そのトピックに対して91のコメント（受講者からは38件）が掲載された。共有フォルダの利用は、40件のアップロードがあった（受講者からは12件）。スタッフからの掲示板へのフォローが積極的についた。

5.5 二つのアクティブ・ラーニング効果

今回の講座は、情報ボランティアを育成することを目的とした人づくり講座である。講座運営を担当

したスタッフも、運営を通じて一つ上の段階に駆け上がったように思う。それを示す概念図が図1である。一人で学習を進めていた人が、この講座の結果、新たに情報ボランティア活動を担うボランティアとして成長し活動が始まる。スタッフは、この講座の運営を通して、情報ボランティアから情報リーダー（ここでは、情報ボランティアをリードしていく人材と考える）として成長する。今回の講座は、そのような3つの歯車が噛み合った活動ではないかと思う。その活動の中で、それぞれの人が次の輪を動かす人材となって学習の輪を広げていると考えるのである。

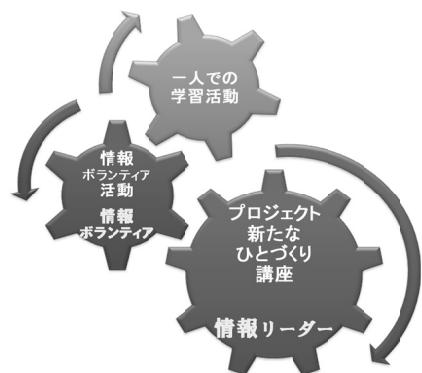


図1 ニットのアクティブ・ラーニング効果

6. まとめ

今回は、アクティブ・ラーニングを取り入れた一般向けの講座を情報ボランティアの方々と企画し運営した。通常のパソコン教室とは異なり、主体的に学ぶ姿勢を持たなければ成り立たないグループ討議、グループウェアを利用してのグループワーク、パソコン教室での援助役や講師役、指導内容を創造するための様々な活動など、主体的な実践を中心とした講座であった。

グループ討議に慣れていない一般市民の講座においてグループ討議を用いたが、グループ討議から始まるグループワークを通して、受講者はグループの目標に向かってともに協働する姿勢を身につけた。グループウェアサービスを用いることで少ない講座時間を補完できた上、受講生はICT利活用の実体験をすることができた。講師体験は、人に教えることの難しさ、学び創造することの楽しさを受講生に伝えた。

受講者の半数以上が、通常のパソコン講座と思い受講をしていたため、修了者は少なかった。しかし、最後の講師役を務めることができた受講者は、その後情報ボランティア活動に自ら参加をしたり、様々な人を巻き込んでの学習の場を構築したりしている。この講座は、情報ボランティアスタッフとして活動を始めるきっかけを与え、情報ボランティア活動に参画する意欲をもたせることができた。

一方、講座運営側の情報ボランティアもこの活動を通して大きく成長した。その理由は、講座のコーディネート、講座の講師役やグループ討議でのファシリテーションの実践、掲示板でのファシリテーションやパソコン教室での受講者の実践に向けての指導が、スタッフにとってのアクティブ・ラーニングであったことがある。

参考文献

- 1) 鷺尾 敦、地域の情報発信力と情報教育力を高める情報ボランティア活動—子どもパソコン教室の企画運営を通して、高田短期大学紀要 20号、pp.91-109、2003
- 2) 鷺尾 敦、下村 勉、地域の情報教育力を高めるためのボランティア活動、日本教育工学会第18回大会講演論文集、pp.241-242、2002